

新潟県薬剤師会 薬剤師ボランティア活動報告書

班名	班	報告日	平成 23 年 4 月 14 日
報告者氏名	室橋 正朋	同行者氏名	須佐 寿(信愛病院)
活動期間	3月 28日 ~ 3月 30日	宿泊場所	ホテル飛天(福島県相馬市)
活動拠点	福島県相馬市	ジャンプへの掲載	掲載してもよい・掲載を希望しない
交通手段	自動車(室橋)		
主な活動(簡潔に)	相馬保健センターにおける処方箋薬の管理および払出		

<活動の内容>

3月28日(月)

10:00 福島県薬剤師会に到着

相馬市保健センターへ向かうよう松本事務局長より指示が出される。当初、福島市内の避難所での活動を想定していたが、相馬市までの距離は50km程であり、2日間の往復には給油が必要となる。松本事務局長の手配により、県庁にて知事が発行する「ガソリン優先給油」の緊急車両登録を受け相馬市に向かう。

12:50 相馬市保健センターに到着

- ・ここを管轄する保健所の担当者を待つ間、入ってくるトラックの支援物資の荷降ろしを手伝う。
- ・生活用品は充実している様子で、必要な物資は市民が自ら取りに来ていた。

14:00 福島県相双保健福祉部の主任薬剤師より状況と活動内容の説明を受ける。

- ・保健福祉部は南相馬市の避難距離帯 30km 圏内にあり、北に向かい相馬市と新地町を管轄している。
- ・相馬市、新地町の各避難所で使用する医療用医薬品の一部を相馬市保健センターに移動した。
- ・保健センターを拠点とし活動している DMAT、JMAT への払出と管理が主な活動となる。

南相馬市にある保険薬局は閉局している店舗もあり、避難せず開局している薬局に処方箋が集中し、混乱が発生していることも判ったが、ここを支援することは今回の派遣の主旨と違うため大きな葛藤を感じた。

15:45 相馬市内の状況調査を行う

- ・相馬総合病院の門前にある「そよかぜ薬局」「さくら薬局」は通常に営業を行っていた。
- ・相馬中央病院の門前に「ニコニコ薬局」は閉局していたが、待っている患者様はいない。

保健センターに戻った際に会津若松から支援にきている保健所職員の話を聞いた。原発事故は福島県全体のことであり、大変な危機感をもって支援にあたっていることが十分に伝わってきた。

17:00 保健福祉部課長より主任薬剤師と同席で再度状況の説明を受ける

- ・大気中の放射能は福島市内より低い。
- ・タイヤ、靴底のゴムから放射線を検出されるようだが、洗浄することにより低下するので安心してほしい。
- ・津波、地震で家屋の損壊を受けていない相馬市民は通常の生活を営んでいる。

課長の言葉から放射能による風評被害に困窮していることが十分に伝わってきた。後に派遣される薬剤師に不安を持たせないよう情報を発信する必要性を感じた。この説明を受けている時に、福島県薬務局長より相馬市内のホテル飛天が手配されたことと連絡がはおり、福島市には戻らないこととなる。余震の心配もあったが被害を受けていないホテルと聞き指示に従う。

18:30 JMAT のミーティングに同席 (報道機関が1社入り撮影)

- ・福島第一原発から 32km 地点にある鹿島総合病院に医師会が臨時診療所を開設すると、都市医師会長よりあった。
- ・静岡、福井、石川の医療チームより計 8カ所ある避難所の状況が報告された。
- ・相馬市保健センター長より一つの避難所に東京大学のチームが 24 時間体制で入っていると報告された。

支援物資は十分にあるが、全員に行き渡ってないため、一部の避難者から不満が出ている様子が伺えた。また避難所によっては、生活環境が悪化していることも認識できた。話の中で同センター長より、新潟県から薬剤師が派遣されており、医療用医薬品の備蓄もあり使用可能と説明して頂いたため、翌日の活動に入りやすくなった。

3月29日

8:30 JMAT のミーティング開始

- ・各チームが避難所の担当を確認する。
- ・前日より市内の診療機関は、ほぼ通常通り診察を開始していると報告あり。
- ・市は400名以上の精神疾患を持つ患者への対応を行っているという報告あり。

9:00 医薬品払出

- ・アムロジン、アレグラ、アレロック、ザイロリック、イソジンガーグル等の払出しを行う。
- ・保健センターから徒歩で行ける避難所(中村一小、アリーナ、旧相馬女子高)の状況を調査する。
- ・新地町を支援している横須賀の DMAT より医薬品の持ち出し許可を得る連絡が携帯に入る。

13:30 JMAT に同行許可を得る

- ・旧相馬女子高を担当する静岡県のチームに室橋が、はまなす館を担当する石川県のチームに須佐が同行した。
- ・28日に払出したイソジンガーグル 250ml を使い「うがい作戦」を行っている、はまなす館では効果が出ていた。
- ・旧相馬女子高では診察開始から終了までに約50名の受診者がいた。

17:00 相馬市保健センターに戻る

- ・南相馬市の相双保健福祉部から第2回の医療用医薬品が搬送された。
 - ・同量位の医薬品が福祉保健部にあるが、今後の移動は予定していない。
 - ・ステロイド外用剤も含まれ、現場のニーズには合致しない品目もみられた。
- メーカーからの抛出品のため、避難所での使用に限定されることは課題であるが、これらを使い避難所から発行される処方箋枚数を少しでも減らすことで、市内で踏ん張っている薬剤師の支援になることを願った。

17:00 ホテル飛天に戻る

前日同様、被災地域内にもかかわらず、やさしい御主人と素敵な女将さんに迎えられて「ホット！」する。夕食はあり合わせの材料と言いつつも大変美味しく、温かい味噌汁がお腹にしみわたる。私達以外の宿泊客は仮設住宅を建設する業者が主であると聞いた。また JMAT もここのお風呂を利用していた。

19:54 余震が発生し怖かった、、、

1~2分の揺れの後、テレビに福島県内は震度3~4と表示されていた。部屋は4階のため結構な揺れで恐怖感もあったが、この地盤と建物の良さは素晴らしいと感じた。

3月30日

8:30 相馬市保健センター

- ・追加された薬品が入った一覧を使用し JMAT に数品目を払出す。
- ・メチコバルを必要とした避難者が旧相馬女子高にいたので、静岡チームの医師に OTC のビタミン剤を提案した。

9:30 前日行けなかった避難所に向かう

- ・払出後向陽中学校に徒歩で向かう、自衛隊の開設する入浴施設があり、避難者が利用していた。
- ・福井県チームの医師より、皆さんは落ち着いておりこの体育館から出勤している方もいるときけた。

12:00 主任薬剤技師に引き継ぎ

- ・受払帳簿の内容を報告し PC と共に技師に引き継いだ。

30日午後から31日以降の支援予定が入って無い状態で相馬市を後にすることが心残りとなった。支援する側は2~4日で戻るが、ここで生活を営んでいる住民のために毎日必死で踏ん張っている行政の方々に敬意をもって福島市に向かった。

14:00 福島県薬剤師会に到着

- ・須佐から松本事務局長に二日間の活動内容を一通り報告した。
- ・室橋から相馬市への支援に大きな危険を感じること無く、今後派遣される薬剤師に安心してほしいと報告した。

18:00 新潟県薬剤師会に到着

長岡市から出発し、この時点で走行距離は約600kmであった。福島県内は各給油所に絶えず渋滞が発生していたことより、福島県民が使用する燃料を使用することなく新潟市まで戻ることができて良かったと考える。2泊3日という短期間の派遣であり、どこまでお役に立てたのか判らない。只、この震災の復興には長い年月を要することを確信できた。今後、ボランティアに入る仲間達に対して、おおいに励まして送り出し、そして帰ってきた時には心より労りたいと考えている。これも重要なボランティアの一つであろう。